

研修機関	株式会社 北國新聞社
研修期間	平成16年10月12日～12月11日
所属・氏名	金沢市立戸板小学校 森田 清治

I 研修目的

- ・北國新聞社の企業理念に基づく新聞作成の努力や工夫を体験を通して学ぶ。
- ・社会科教師として社会に対する見聞を広め、資質向上を図る。
- ・N I Eの実践を図るため新聞社との連携を深める。

II 研修内容

1 オリエンテーション（1日目）

北國新聞社の基本理念・新聞作成の過程・編集局各部の概要

2 編集局にて取材

①社会部にて記者と同行取材、記事作成練習【第1週】

金沢市立高岡中の「さわやかトイレ」・県高校新聞コンクール・大同生命助成金贈呈式・ヤノベケンと夕食持ち寄り会

②各部にて仕事内容学習、記者と同行取材【第2週】

写真部で風景写真や人物写真の撮影と編集・文芸部で金沢市立夕日寺小の子ども討論会に同行・社会部で各種展示会の取材同行

③社会部にて単独取材、記事作成【第3・4週】

金沢市立戸板小の「森づくり教室」「正美保育園と交流」・金沢市立西南部小の公開研究会・金沢市立長田中の出前演劇教室・全国小学校国語科教育研究大会・県立桜丘高のスーパーハイスクール講演会・学校アート展・教職員永年勤続功労授与式・三姉妹個展・市生涯学習課出前講座

④公安記者クラブにて関係者と懇談、記者と同行取材【第5週】

ア．懇談

- ・県警広報部長と「人権保護とマスコミ対応」について
- ・県警少年課長と「S & P体制の必要性和県の少年犯罪の状況」について
- ・金沢東警察署副署長と「警察、学校、地域の連携」について
- ・自衛隊金沢駐屯所広報室室長と「新潟中越地震の義援活動の状況」について

イ．同行取材

県警けん銃大会・ネット詐欺家宅捜査・クマ銃殺現場・裁判傍聴（父殺人未遂事件、公務員児童買春事件）

⑤経済部にて仕事内容学習、取材（同行・単独）【第6週】

本社訪問（ソニー生命保険、小松商工会議所役員）、社会保険労務士経営者セミナー・N T Tドコモ附属小にて出前授業・金沢弁直筆手書き熨斗袋会社・物流フォーラムin金沢・東証中間決算報告

⑥社会部にて単独取材、記事作成【第7～9週】（主に教育関係）

金沢市立浅野川小の米國小との交流・金沢市立大浦小の公開研究会・金沢市立泉中の公開研究会・金沢市立菊川町小と聴覚障害者の交流・金沢市立緑中スローフード授業・不登校児童生徒の取材・県立二水高と金大留學生の交流・市グループホーム介護研修・木の玩具展・安江金箔工芸館冬季展

Ⅲ 研修成果

1 企業の理念や厳しさを通し

①地方紙としての誇り

「地方は世論の本なり」を社員教育の根底に位置付けている社では、取材も記事もすべてが地元根づいたものになっている。記者一人一人は個人だが、社員一同「ふるさと紙」作りに誇りをもち、そこに準じて仕事に従事していることが強く感じられた。揺るぎない大きな柱を中心に組織としての統制ができていた。学校現場でも一層教育目標を柱に一丸となって組織していく必要があると感じた。

②企業人としての責任

記者は勤務に束縛される時間が長い。取材と取材の合間が空くこともあるが、逆に間がぎりぎりの取材もある。朝早いものから夜遅いものまである。緊急の取材もある。そのような勤務状態の中で、いかに取材し記事を書き時間内に仕上げるかが問われる。結果が最優先の業界だ。それだけに自己管理が必要である。当然、結果がでない場合は、厳しく叱咤激励され責任が問われる。研修期間中、そのような光景をよく見かけた。一日一日が勝負で常に職場の緊張感は保たれていた。学校も教師一人一人が仕事や立場に対する自己責任をもっと自覚する必要があると感じた。

③記事の重み

取材には相手が存在する。相手を配慮しながらも事実を正確に取材し、相手の思いに沿って文章化しなければならない。それだけに誤字脱字はもとより、内容が意に沿うか気がかりで記事に責任を感じた。研修期間中これが一番のプレッシャーになった。慣れない私にとっては、記事にした次の日などは苦情がこないかハラハラさせられた。毎朝新聞を見ることに恐怖さえ覚えることもあった。これほど気をつけて文章を書くことはなかった。若い頃お便りを書くのに何度も読み返し印刷したときの思いが蘇った。公開される書類、保護者の目に触れる文は何年たっても常に緊張感をもって書くようにという戒めの機会となった。

2 情報産業に従事する人の努力や工夫を通し

①記者としてのプロ

台風上陸で木が倒れた写真を撮るために暴風雨の中一人で出かける記者、捜査の場面の一瞬をとらえるために同じ姿勢で数時間待ち続ける記者、クマ捕獲の瞬間を撮影するために危険と背中合わせに取材する記者、自ずと仕事に対する情熱が伺える。

また、一つの記事には記者としての思いや、編集者、取材相手、他社記者との駆け引きがある。新聞を読んでいただけでは気付かない部分がある。取材した記事が脚光を浴びる瞬間のために、時として身を削り待つ姿、上司に頭を下げる姿、まさにプロ意識の成せる行動だ。他業種のプロを見て我がプロ意識の糧になる。

②個々の積み重ね

何重ものチェックを繰り返し一つの誤字も許さない編集体制、時として少しでも新しい情報を載せるために制限時間ぎりぎりまで粘りこだわる編集局、一つ一つの記事が組織的な努力によって編集され紙面になる。学校では一人一人に任せられ、意外と組織的な点検、努力というものが欠けていたのではないだろうか。

3 取材を通し

①取材先の人の姿から学ぶ

取材を通して普段出会うことのできない人や入ることのできない場所に入ることができた。例えば社長が企業イメージを下げないように必至に報告する中間決算の場や、警察が物々しく出入りし数社のマスコミが押し寄せ騒然とした家宅

捜

査の現場に立ち会うことができた。そこには人の思いがあり、生き様を伺うこともあった。社会科教師として見方や考え方が広がった。特に今回の研修で印象に残った取材が二つある。

一つは、父が情緒に障害をもつ息子の将来を悲観しバットで殴打した殺人未遂事件の裁判を傍聴したことである。裁判の公判で涙声になり事件の様子を語る父に、それを弁護しようとハンカチを目に当て息子の生い立ちを語る母の姿は今も目に焼きついている。この生い立ちを考えると、同世代の子どもを教育してきた私たちの教育にも起因するような気がした。必死にいい子でいようとしてきた子が大人になり情緒への負担が切れ家庭内暴力に走った。息子の言動に恐れ、他人に害を加える前に父が犯行に及んだ。きっと子どもに期待したのは親だけではなくなかったはずだ。私たちは、学校でいい子を求めすぎているのではないだろうか。「いろんな子がいて当たり前」と思うことがいかに大切か、改めて考えさせられる場であった。

もう一つは、「初誕生」や「一年生」「うちの孫」というコーナーの取材をしたときだ。カメラ越しに見える家族の顔は微笑ましい。その雰囲気こそ、「幸せ」の一コマであろう。この幸せな瞬間を学校は壊してはいけない。この幸せが保たれ、それを助長していくことが学校の責務であろうと使命感を感じる取材だった。

②取材先で教育を語る人から学ぶ

取材後、私が教師と知ると今の学校や教師について語る人が多かった。時として取材より言葉が弾む場合もあった。警察関係の人は「もっと生徒指導面で中小幼へと連携を強めていくことが必要」、会社関係の人は「先生はもっと外に出ていろいろな社会を経験しないと」など、それぞれの立場で語った。強い要望にも感じられた。一人だけで受けとめられる問題ではないが、社会がそれだけ学校に関心を寄せているのだと実感させられた。

4 記事を通し（N I Eへの活用）

①象徴した言葉から記事を読む

記事は客観的な文で無駄な言葉を削り、より正確に事実を伝えている。限られたスペースの中、記者が取材を通して感じたことや思いなど主観的にとらえ象徴した一言あるいは一文があることに気付いた。その一カ所は、長時間かけた取材、危険な思いをした取材、苦戦の末に成功した取材、それが凝縮されている部分になる。その部分を読み取ることが新聞の行間を読むことになるのではないだろうか。これからN I Eの実践で、この部分にこだわって読んでいきたい。

②一段落目の文から読む

記事の全てを一段落に集約することを教えてもらった。そのためには全体像をつかみ「だれが・いつ・どこで・なにを・どうしたのか」を数行でまとめる力が要された。そして、次々と記事を具体的に掘り下げていく構成が必要であった。まるで、国語の説明文教材のような展開だ。この記事の視点を参考に教材文の指導に臨みたい。また、子どもが新聞を書いたり発表会の原稿など書いたりするときにも、このことをポイントの一つとして指導に活かしたい。

③見出しから読む

記事作成の段階で明確になったことがある。タイトルと見出しの違いだ。今まで、この両者を曖昧に使っていた自分を恥じる機となった。記事を左右するほどの見出しは重要で作り方にコツがあることを教えてもらうことができた。このこ

とを意識して子どもの新聞作成活動に反映していきたい。

IV 今後の課題

今の教育現場に馴染んでいないが、今後「名刺」は必要であると感じた。自分が何者か示すことにもなるが、渡すことで責任の所在が明確になる。学校では、もっと個人の行動に責任をもち、社会からの重圧感を自覚し行動すべきであるとする。

次に広報活動がもっと必要であることだ。公的機関や企業には必ず広報担当がいて取材に対応してくれた。社会では説明責任が求められていることを強く感じた。広報は、全体像を把握し責任をもって対応していた。現場では主に管理職が担っているが、教師一人一人が広報であることを自覚することが必要と感じた。校内の情報交換を活発にし組織を語るだけの見識と意思疎通が大切である。現場における広報活動を前向きに考えていきたい。

また北國新聞社の方は個々が過重なほどの仕事を抱えながらも、何も分からない私に親切に対応してくれた。現場で十年経った今、職場での私の言動はどうであったか顧みると、恥じる点が多々ある。今一度初心に戻り、謙虚さをもって職務に専念していきたい。

貴重な研修の機会を与えて下さった北國新聞社と石川県教育委員会の方々に厚くお礼を申し上げます。